

京鹿子

平成二十八年十一月一日發行
第一〇七号

11月号

鈴鹿呂仁

拾掬集 その十四

単線のスイツチバツク初紅葉
溪流の音の彩^たみたる初紅葉
走り蕎麦主のくせ字太きかな
相席の講釈すすする走り蕎麦
咆哮のこほろぎ犬の耳立てる
鴟高音凶星を逃げる瞳かな



— 近 詠 —

鈴 鹿 仁

萩まつり

神 鈴 の ひ び き は 吉^よ 言^{ごと} 萩 月 夜

萩 ゆ る る 翅 あ る も の の 息 を つ ぐ

ち は や ぶ る 神 へ 一 言 萩 こ ぼ る

— 追 懐 — (そ の 二 十 四)

風 生 れ ば か ぜ の 儘 む る 秋 の 蝶
〔平成十一年作〕

任 侠 の 案 山 子 に 頼 る 農 な さ け
〔 〃 〃 〕



—近詠—

和田 照海

被爆樹

蝉鳴いてひろしまの朝はじまりぬ
揃ふまで鳴くひろしまの油蝉
被爆樹のうやむや鳴きに蝉二つ
ドームより勤行鳴きの油蝉
蝉の木になりきつている梧桐



松本 鷹根

私 灯

新涼の鷺に自讃の佇立あり

琴坂のかそけき水耳秋陽研ぐ

堅田港残暮の影を繫留す

昼灯の黙の和みに梨を剥ぐ

秋灯の遠瞬きや姉白寿

近 詠



塩貝 朱千

草いきれ

噴水の風下が好き子も犬む

白いベンチ猫とわたしに草いきれ

雷鳴や雀百羽を吐く大樹

送り火やひとりの家へ戻りけり

ひゅうと鳴く風の電話か夕ひぐらし

英華採集

八月の底に三百十万體

京 都 澤 近 栄 子

終戦から七十一年目を迎えた今年、米国のオバマ大統領が国主として初めて広島を訪問し、その式典に参加した。俳句の季語として「八月」を考えた場合、深く重いものであると認識せざるを得ない。この「八月」の底に戦没者三百十万人の御魂が眠っていると捉えた作者の底意には、この戦争を風化させてはならない強い意識があるのであろう。

バツタの子草に抱かれて風となり

福 知 山 赤 松 鈴 江

飛蝗が、生活をしている場所は草叢である。草叢こそが、安心安住できる処であろう。「草に抱かれる」は、人が「大地に抱かれる」と同じでそこに母を感じる。母に抱かれた飛蝗は、夢を見ながら「風となり」御伽の国へと飛んで行ったに違いない。掲句は、メルヘンな世界へと読者を誘っているようだ。

休耕田南瓜ごろごろ不貞寝して

兵 庫 太 田 悦 子

農家にとって少子高齢化に伴う過疎化現象は、深刻な問題であろう。様々な事情を抱え休耕田になった処は、今では南瓜畑となつている。ところが、思わぬ豊作となつた南瓜が所狭しとごろごろと横たわっている様を、南瓜が不貞寝していると捉えた作者の心情は、複雑な思いがあるに違いないが句としての俳味が良く出ている。



吾亦紅 藤岡紫水
 愛に飢ゑ情に溺れて吾亦紅
 底抜けの空に夕月野分あと
 月今宵一会にて成る人の縁
 乳房あげ仰臥の陶狸鱒雲
 野の日暮れ目で風を切る鬼やんま

どんぐり 沼田巴字

山茶花の一本にして散るばかり
 落葉して天地一切がらんどろ
 そぞろ寒民を忘るるまつりごと
 どんぐりの行き所なく踏まれけり
 地の色の一つをつかひ秋の虹

流れ星 丸井巴水

軍服を脱いだつもりの終戦日
 冷房の鈍き本屋の刺激本
 流れ星不意に鳴り出す電話音
 飛ぶ鱒へ女々しく小石投げてみる
 星流れ終末録のいさぎよさ

夜の虹 伊藤希眸
 夜の虹みんな見たくて誰も知らぬ
 透明な躰造りに鮎を食ふ
 逃げ水を追ひし一生太刀飾る
 馬鹿が引くといふ夏風邪に憑かれをり
 心の帆浮かべ透して百合抱いて

夜のブランコ 北川孝子

梅雨穂草しのびのやうに米寿来る
 話題また昭和に戻る酷暑かな
 螢袋夜のブランコに座す男
 針穴に糸の通らぬ暑さかな
 たつぷりと生きて暑さに耐へて居り

向日葵 直江裕子

梅雨蝶のそれでも飛べるところまで
 青黴におんなの隙を見透かされ
 家系図の五代目あたり黴匂ふ
 向日葵は昔いつぼんづつだつた
 大花野生きてゐることもう忘れ



一の矢 高木晶子

雨に竹つモネの睡蓮モネの青
射干の束を担ぐも男かな
鈴囃子褪色の夜を輝かす
一の矢も二の矢も蟬の天王山
片蔭をひと膝ゆづる同世代

得意技 木戸渥子

梅雨冷やむかし相合傘とかも
現職はふつつかな主婦夏落葉
日々酷暑忘るといふ得意技
盆用意夫の相槌いい加減
池の面に塔の倒影乱れ萩

へらくレス 奥田筆子

噴水や地球を肩にへらくレス
月下美人それからギロチン台に向き
小猫のやう部屋サンダルのころがつて
いわし雲都は腕の到達点
相続の厄介美田と猫と紐

服喪の星座 井上菜摘子

寝返りを打つてほたるぶくろの中
ほたるぶくろ服喪の星座組みにけり
水つぽくなりし優しさ水を打つ
夏野原ここにあるから空缶蹴る
相槌をうって夕焼たためない





京鹿子集

鈴鹿呂仁選

八月の底に三百十方體

京都 澤近 栄子

夕焼の入道雲がごつつんこ

交信の亡夫のかほ見す星今宵
陽に水にめぐみ息づく青田波

身に染みてしまつた俳句蓼の花

先斗町下駄の音して団扇風

アリゾナ 伊吹 之博

秋立つや授乳中なる授乳室

半島は指先揃へ夏茶碗

バツタの子草に抱かれて風となり

福知山 赤松 鈴江

半夏生好む従兄と話し込む

夏の宿ちやん付けで呼ぶ古希五人

同窓会夕立過ぎて弾む宴

半夏生朝日分け行く舟の音

六月の庭木のみどり空かくす

オハイオ 水谷 直子

残照の水門青鷺の待ちぼうけ

風光るブルーの空は葉の間から

休耕田南瓜ごろごろ不貞寝して

兵 庫 太田 悦子

庭先に客の声あり薔薇の花

隠れ稚魚そつと顔出し菱の花

ペランダの董はすでに実となりて

眠る児の睫毛の翳や晩夏光
札 幌 野村 鞆枝

空蝉の前足拌めるままにあり

熱帯夜記憶ちがひはそのまに

稲妻や遅れて届く宅配便

夏蝶の曲れる先や紅白帽

公園の茶店の氷旗風に揺れ

潮風を車窓に入れて酒田港

葉桜や幸福橋をわたれども

初秋を今朝も感じる集荷日

店先の鰻の香へと列に入る

大豊作家庭菜園届く胡瓜

初秋刀魚震災の港大賑はひ

ケールブルーカー青時雨抜け頂上へ

梅雨寒や朝勤^{あそび}へ急ぐ廊長し

狩に出た親待つ燕泣きもせず

蜘蛛の巣の主は見えず夕陽かな

新涼や百四歳のたなごころ

少年に帰る家あり合歡の花

秋扇膝に余談のやうな風

スイッチバツクいよよ天まで蕎麦の花

どの道も熱気やビル街の淀み

猛暑かき混ぜスクランブル交差点

墓洗ふ白いリボンに髪束ね

綿百のシャツ着て暑さ凌ぎをり

梅雨明ける糊の利きたる綿シート

炎天の釣り人の影流されし

葉のしづく記憶の底の雨蛙

夏草の乱となる庭風やはし

髪洗ふわたし謝ることとする

眉うすれ齢をふやす油照り

晩夏光ふつと考妣現る銀座

醉芙蓉砂が崩れてゆくやうに

いちはやく人智を越え知る風知草

一善の積もればたふとし風知草

過ぎたるは知は痴をまねく心太

夏座敷無我にはなれぬ俄か跣坐

星今宵もう逢ふことのなき別れ

またたきは光年の時差星涼し

四番打者口一文字油照

眉のなき素顔に回す扇風機

これからの世に一票や花木種

鉢のためカーテン降ろす大西日

昼寝覚めおそき夕餉は馳走なり

八月や女知事なるうれしさよ

松 戸 岡山 敦子

習志野 上野 紫泉

船 橋 元橋 孝之

さいたま 神田 惣介

高野 春子

布川 孝子

東 野中 圭子

金子 正道

東 野中 圭子

東 野中 圭子